

浄土

1991-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別役承認雜誌) 第三五号
平成三年三月二十五日印刷 平成三年四月一日発行

第五十七卷

四月号





四月の秀句

神々の座とし春嶺なほ威あり

福田 蓼汀

春の野を持上げて伯耆大山を

森 澄雄

春の浜大いなる輪が画いてある

高浜 虚子

四月号



誠しく専修念仏の一処に入る人い
みじくありがたきなり。

——『念仏大意』

目次

——花まつり法話——

心の誕生日……………成 田 光 俊……(2)

(な)(む)(な)(む)(か)(め)(ら)(4)

赤ちゃんを写す……………ぬのむらてつや……(9)

仏教とデス・エデュケーション

——私の活動ノート——

〔1〕……………藤 木 雅 清……(17)

読者のページ

釈尊と浄土教(上)……………上 野 浩……(34)

(ひ)(と)(く)(ち)(俳)(話)〔3〕花 御 堂……………(24)

季語やぶにらみ (12)

あすなる忌

……………木 下 隆 一 ……(26)

◆◆連載・話の旅(九)◆◆

超 常 物 語 ⑥……………松 浦 行 真……(41)

表紙絵 小林治郎画

心の誕生日



なり
成 田 光 俊
た こう しゅん

(横須賀市専福寺住職)

桜のつぼみが赤くふくらみ、白い花びらが姿を見せ、気の早いのが空を舞う頃、子どもたちの「甘茶ちょうだい」の声で、お釈迦さまの誕生を祝福する花まつりは始まります。前日の昼間、せっせと摘み取った木の葉と色とりどりの花で織りなす屋根で、白木のお堂は美しい花御堂にと、一夜にして変身してしまうのです。その花御堂で、幼い手を合せ、玄関で甘茶をもらう。これが子どもたちにとっての、花まつりの日課です。この甘茶を飲むと頭が良くなって、字を練習すると上手になると伝えられ、子どもたちに夢をあたえてくれます。

もう十数年も前のことですが、お釈迦さまがお生まれになったルンビニーを訪れた時、産湯をつかわれたと伝えられる、御堂の脇の池のほとりで、現地の子どもたちと話をすることがありました。

お釈迦さまが生まれた時には、「辺り一面に花が咲きほこっていた」といわれてますが、たまたま訪れた時が冬だったせいでしょ、花の姿はなく、ただ草原でした。

草の上を素足にサンダルで歩く少年たち、身にまとったものは粗末で、体はなんとなく埃りっぽかったが、少年たちの目は輝っています。誰れともなく草の上に車座になり、布で作ったカバン（終戦直後、婦人がつかう帯の芯で出来たカバンを使っていたが、同じようなものである）から数学や英語の本を取り出して語る姿。目は光っている、そこに未来への希望が感じられました。あの少年たちは元気だろうか、過ぎ去った日のことが想い出され、また、身の廻りにいる子どもたちはどうだろう、と、考えさせられてしまいます。

いま、子どもたちの中には「本当に生きるとは、どういうことだろう」と考えている人が沢山います。ある子どもは本を鏡として「自然の美しさや自然の中で

動物たちが仲よく生活しているのを知り、あのように生きてみたい、と思っています。それは、何千、何万冊と出版される本の中で、子どもたちが「すばらしい」といつている数少ない本を指しているなかで知ることが出来ます。それは、今の社会がまったく反対に動いているからそう感じるのかも知れません。本が子どもたちの心をやすませ、解放しているようです。それならばせめて、一時の気休めでない、明日への希望の力になってほしいと思います。しかし本当は、大人たちが、社会が、子どもたちに夢をあたえる鏡にならなければいけないのです。

先年、高校卒業寸前の少女が訪ねて来ました。少女は「修行したいのですが、お願い出来ますか？」と言うのです。

本心かどうかは別にして親が「家の子に修行させてくださいよ」と、言うてくることはありますが、本人自身が来たのは初めてのことでした。それに真剣な姿にうたれて「この寺は坐禅などはしません、一日修養会をしていますので、よろしければおいでなさい」と、つい言ってしまいました。修養会も近づき、忙しさのなかで少女のことをすっかり忘れていた私の前に、私にとってはまったく突然、少女は現れました。

一日修養会は九時に始まり、お勤め、お話して午前中の行事を終え、全員で昼食をし、午後は礼拝、お念仏と続き三時半にはすべてを終えることにしています。参加者は中、高齢者が大部分で、特にご婦人です。十代の参加は、八年間続けましたが、初めてのケースです。

私も不安でしたが、少女も、とまどいと一抹の不安をただよわせている様子でした。かつて二十代の方が参加した時もそうでしたがなんといいても、坐ることが苦手のようでした。いまは正坐をすることが少なく、誰れもが坐ることを苦手としているので無理ありません。『楽にしていいますよ』と、声をかけたがそうもいかないらしい。

しかし話も半ばを過ぎた頃から少女の顔は段々と輝き、身体を乗り出すようになり、昼食の時には、率先してお手伝いをし、お年寄りの面倒を笑顔でしています。いつの間にか私の不安は消えてえ、それどころか、午后になるとお年寄りの世話をしながら、年齢の差を越えて、みんなの中にとけこんでしまいました。

これを縁にして、少女は毎月一度は寺に来るようになりました。学校での話をしたり、家庭での出来事を楽しそうに話しています。遠い昔ルンビニーで少年たちが語ったのと良く似ています。北海道で生まれたという少女は、不幸にして父

を亡くしたと語っていたが、その瞳はうららかで印象的でした。

寺に訪れるようになって数ヵ月後、少女が石段を飛び跳ねるようにして来ました。「なにか良いことがあったの」「そうよ」と、笑いを浮かべながら答えると、あとは何も語らずに本堂に入り、一心に合掌しています。しばらくして、いたずらっぽく笑った少女は「大学に合格出来たのよ、ことによると、留学することができると思うんだ」と、嬉びをいっぱいにして話しました。

少女はアメリカの大学と提携している学校を受験し、見事に合格したのでした。その学校を希望した理由は、成績が良いと留学することが出来るからだだったらしい。父親が元気の時に、約束をしていた関係もあったといいます。「それはお目出度う。お父さんもさぞ喜んでいるでしょうね。お祝いに何がほしい」「本当にお祝い下さる。……欲しい物があるんだけど」「おっかないね、高い物は困るよ」少女はふふ……と笑いながら、私の左手を見ていたが、「お念珠が欲しいの……それも出来たらそれが……」と、左手の首首にある念珠をゆび指しました。それは白檀で出来た小さな腕輪型の念珠です。「これ」怪げんそうに聞き返す私に、「仏さまとご一緒にいられるように思えるのです」と素直に答えたのです。小さな念珠を押しいただくように受け取った少女は、初めて一日修養会に来た

時には、お年寄りが多く、場違いの場所に来てしまったのかと後悔した。が、話を聞いているうちに、今まで経験したことのない新鮮なものを感じた。人間は生まれたのでなく、生まれさせてもらっている、と聞いた時、しみじみと、自分の命を無駄に出来ないんだと思った。命をいただいた自分が、することはなんだろうと一生懸命考えた。それでお昼の時、見ず知らずの人達だったが、お手伝いをさせていただいた。今まで感じたことのない、すがすがしい気分になった。家でお手伝いをしても、いままでそんな気持ちになつたことはなかった。何故だろうか。考えてみると、「お手伝いをしてあげるわネ」と、そんな気持ちでしていたので、不満が多かった。お話の中で、「させていただく気持ちが大切です」と言われたとき「そんなことないワ、してあげるのよ」と反発する気持ちが強かったが、なぜかお昼のときに、自然にさせていただく気持ちになった。「あの時、私の心が、新しく誕生したように思えるのです。仏さまが、私の心を誕生させてくださったのです。その仏さまと一緒にいたいのです」と語るのです。

誕生日は年に一度かならず訪れてきます。が、心の誕生日を迎えられた方は、何人いられるでしょう。心の誕生日は、迎えようとしても出来るものではないのです。少女のように、ある日、突然と訪れてくるものです。

暑い日も終りに近づいた頃、「しばらく訪ねられなくなりました」と少女は淋しそうな顔をしていた。希望通り留学がきまったのです。

「良かったではないの」「嬉しいけど淋しい気分、また、お願いがあるんですが」と、少女はバックから丁寧な小さな包を取り出しました。それは仏像でした。

「当分、お伺いすることが出来ないの、向こうでおかざりしたいんです。お魂を入れてください」「丁寧におかざりするんですよ。テレビの上などに置いてはいけませんよ」と、少女はお魂を入れた仏さまを、抱くようにして喜んで帰りましたが、三日目に大変なことが起きてしまったのです。

初めて聴くヒステリックな少女の声に驚きました。空港から電話をしているという少女は、「人込みの中で、腕につけていた念珠が切れてしまった。アメリカに行きたくない」と、駄々っ児のように言うのです。「念珠の玉はどうしたの」「全部捨った」「誕生した心が、喜んでいるんだよ。今度、直してあげるから行きなさい」と。そしてやっと少女は飛び立ちました。

アメリカに着いたという報告にあわせて、「毎日、仏さまを拝みながら、念珠とにらめっこしています」と連絡してきました。心の誕生はしたもののなにか起きるか心配しながらも、少女の帰りが待ち遠しい思いです。

なむなむカメラ

(四)

赤ちゃんを写す

けんちゃんの新せきで赤ちゃんが生まれ
ました。

赤ちゃんは いったいどんな顔をしている

のかな。

目や鼻や口や耳は小さいんだろうな。手や
足はほそいんだろうな。どんな声で泣くん

ぬのむらてつや



ろう。そんなことを考えると 赤ちゃんに会うのがとても楽しみです。

みなさんもそうでしょう。始めてのところに
へ出かけて 始めての人に会ったり 始めて
の景色を見るときは胸がどきどきしますもの。

食いしん坊のけんちゃんが デパートの食堂のテーブルにすわって 注文したお料理がはこばれてくる間のあのわくわくした気分と同じです。

「さあ けんちゃんは出かける支度ができましたか」

お祝いの品物を持ったおかあさんが呼んでいます。

「ちょっと待って」

けんちゃんが 急いで部屋から持ってきたのは あんなにむなむなカメラです。

そうです。世にもふしぎなカメラです。ひかりにむけて “なむなむ” といいながらシャッターをおすと スウーッとカメラの中へ入ってしまうのです。そこには 必ずピカリ、なむなむがまっついていて けんちゃんのとつた写真を見せてくれます。やさしい友達なのです。

赤ちゃんは スヤスヤと眠っていました。

「まあ かわいいこと。けんちゃんも赤ちゃんとき こんなかわいかったのよ。おかあさんは おとなりの部屋でおはなしをして

いるから 少しのあいだ赤ちゃんを見ていてあげてね」

けんちゃん は こんなにそばで赤ちゃんをながめるのは始めてだったのです。

「いいよ 目をさましたらおしえてあげるよ」

ふとんの中の赤ちゃんは ただ眠っているばかりです。ときどき 目をクリクリとうごかしているのは そばにいるけんちゃんを見ているのでしょうか。そして 小さく開いたくちびるが 真珠の玉のようにコロコロと光ってうごくのは うたでも歌っているのでしょうか。

おだやかなその寝顔は 深い南の海に住む

真珠貝の中にいるようでもあり 一面が黄色にそまった菜の花ばたけに浮ぶ船の中でもあるようです。

「そうだそうだ これをわすれていた」
そういいながら けんちゃん はなむなむカメラを手を持ちました。

「これで写せば いま赤ちゃんが何をしているかわかるかもしれない」

実際 このふしぎなカメラは 何でも写してしまうのです。たとえば けんちゃんを写すと いま何がしたいのか 何が食べたいのか ハンバーガーなら何個まで食べられるかまで写し出します。それは びっくりするほど正確なのです。

しかし 何もしていないような眠っているだけの赤ちゃんを写しても かわいい寝顔がうつるだけではないでしょうか。赤ちゃんはそれだけでいいのですが。

さて けんちゃんはそのとカメラをかまえると なむなむといいながら 真珠のように光るくちびるに向けてシャッターをおしました。

カチャッ！

わた菓子鍵が おとうふの戸にかかったようなやさしい音がして けんちゃんはたちまちに なむなむカメラの中です。

「やあ いらっしゃい。また会えましたね」

くらやみの中で姿は見えませんが いつもとかわらないピカリのなむなむの声です。

「では さっそく写します」

ピカリのなむなむがいうと あたりが真昼のように明るくなると同時に けんちゃんのまわりがぐると三六〇度 そして高さは頭のずっと上までの写真です。

「わあー すごい」

それは まるでプラネタリウムで天の川やオリオン星座や北斗七星を眺めているような宇宙のパノラマ写真です。

「ぼく こんな写真をとったかなあ」

けんちゃんが首をひねっているので ピカ

りのなむなむが説明してくれます。

「これは さっきの赤ちゃんの写真です」

「えーえーえー なんてー」

「たしかに間違いありません。ほらここを見てごらんさい」

おしえられたところを見ると たくさんの人の顔が 星のように並んでいます。それも百人や千人ではなく 何千万何億人です。その中には 赤ちゃんのおかあさんの顔もあります。

「そうなんです。赤ちゃんは みんなの中から生れたのです。こっちも見てください」

顕微鏡をのぞいて見ると なにかが動いています。

「それが地球上に生れた初めての生物だといわれているアメーバです。今から約二十億年ぐらい前ですが そのいのちが赤ちゃんにまでなってきたのです」

「へえー ずいぶん昔からつながっているんだねえ」

ドシン！

とつぜん 目の前に大きなビルのようなものが立ちました。見上げると百階建てぐらいありそうな動物が でっかいギョロギョロ目玉で けんちゃんを見おろしているではありませんか。

「たすけてー」
といって ブルブルふるえているけんちゃん

を。ピカリのなむなむがまもってくれます。

「だいじょうぶ。このかいじゅうも人間が生れるずっと前に地球に住んでいたのだから

もしかしたら けんちゃんはいかいじゅうの生れかわりかもしれないよ」

そのとき かいじゅうの頭の上 空いっばいにいなずまが走って 大つぶの雨がザアザア降りだしました。

水は滝となってゴーゴーと川をくだり ガリガリと岩をけずって ザラザラと砂をはこび サーサーと海へ入って ピチピチの魚の友だちになります。池のほとりでは 子どもたちがワイワイとはしり 草や木は土から水をすってスクスクそだつのです。

雨がやめばホカホカとお日さまの光がふりそそぎ おかあさんのおっぱいをスウスウとおいしくのむのです。

音は あたりいっばいに鳴りひびきます。

赤ん坊ザアザア ゴーゴーさわぎ

ガリガリ ザラザラ地球をかじる

サーサー ピチピチ夢あそび

赤ん坊ワイワイ スクスクのびて

ホカホカふとん スウスウねむる

クラリネットといっしょにドラムや太鼓がうなり トランペットがさけぶのです。

「にぎやかだね。赤ちゃんの音楽は」

けんちゃんが おどろいたようにいうと

「そうなんです。赤ちゃんは 宇宙のすみからすみのことをみんな見て聞いて知っているのです」

ピカリのなむなむの言葉をきいたけんちゃん
は ちちこまっていた手足とからだを大きくく
のばして 力いっぱいのをしました。

「うーん」

あんまり元気よく手をのばしたので いつ
のまにかなむなむカメラのシャッターをおし
てしまったようです。

カチャッ！

「うーん」

おもいっきりこぶしをふり上げ 小さい顔
を真っ赤にしてのびをしている赤ちゃんの声。
まるで指揮者のようです。

「ふふふ ぼくと同じことをしている」

けんちゃんがのぞきこむと 目をうつすら
とあけてこっちを見ました。

「ははー ぼくのことを かいじゅうだとお
もっているのかな。ガオーガオー」

それに答えるように

「オギャー オギャー オギャー」

赤ちゃん交響曲は にぎやかです。

(つづく)

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十七巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一歩一歩前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもつて、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

仏教とデス・エデュケーション——私の活動ノート……(1)

藤木雅清

(D・E・S——
臨死問題研究会代表)

はじめに

私が主宰しているD・E・S——臨死問題研究会では、毎月講師を招いて公開の月例勉強会を開いているが、毎年、一月の例会は、年初ということもあり私が話すことにしてい

る。かつては前年を振り返って総括し、新しい年の活動展望などを話していたのだが、一般（浄土宗教師以外）の方も入会されて総会を行なうようにもなり、かつ、わずかとはいえ参加費をいただいている関係上、事務連絡的な話に終始するのめどるかという気持ちから、この二、三年は問題提起的な講演をする

ようにしている。本年は、「生命問題の諸相と宗教」と題してつぎのような話をした。

今年三月、当会は設立以来まる七年を過ぎ八年目になる。他からの評価や表面的な業績は別にして、この間、会は何のために活動を継続してきたのだろうか、私は何のために活動に参加してきたのだろうか。明確に表現できない時期もあったが、いまは、はっきりとこうい切ることができる。己れの体験した「いのちの感動」を多くの人びとと共感、共有したいからだ、と。

これまで、ひとりの浄土宗教師として、私なりに生命問題を考え活動してきたことを、本誌からいい機会をいただいたので整理してみたいと思う。

本山に勤務して

一九八四年三月、私は大本山増上寺に勤務しており、文化財の管理全般と出版物の編集を担当していた。勤務以来、退職するまでの七年間、担当を替わることはなかった。

増上寺といえば、近世の史料を中心とした文化財の宝庫である（もちろん中世の文化財も少なからずある）。第二次世界大戦によってほとんどの堂宇を灰燼に帰した本山にとって、復興の中心は本堂の再建である。一九七三年、浄土宗開宗八〇〇年記念事業として見事に本堂落慶を果たし、ようやく文化財の整理に着手することになり、大正大学の教授陣を軸に同大学院生らでチームを組み、すべての

文化財を整理管理したのである。それまでは経蔵と崩壊寸前の宝蔵庫（のちに解体）にうず高く積んであった文化財群、そのほか、安国殿、本堂裏、三門楼上などにも雑然と散っていた。チームで整理した総数は、古文書・古記録を中心とした史料数万点、宋・元・高麗の三大蔵経二万巻弱……と膨大なものである。そして、すべての文化財をカード整理したのち『増上寺史料集』（全二巻一三冊）を編集、刊行したのである。

私は、この一連の業務を一貫してお手伝い（事務）してきたわけだが、この間、並行して機関紙『三縁』を中心としたいいくつかの本山出版物の編集も兼任してきた。私にとって一九八四年三月というのは、『増上寺史料集』の最終配本を終えようやく完結した時期でも

あった。

『三縁』編集を担当して以来六年間、一貫して考えていたのは、何とか誌上で「社会的な問題と仏教」という視点を取り扱いたいということだった。そんな試行錯誤を繰り返していたとき、私にとって、まさにターニングポイントともいえるべき三つの衝撃的な体験がわずか一週間のうちに起こったのである。

三つの出来事

そのころの『三縁』誌は、時折に社会的な問題を単発に企画し掲載していた。たとえば原水爆と核の問題、平和運動、高齢者社会問題、等々である。そうしたなかで、臨床医師であり浄土宗の宗侶でもある奈倉道隆先生に

「安楽死」をテーマに連載していただいた。

いまから思うと私自身、問題の背景もろくに理解しておらず、かなり浅薄な問題意識で執筆依頼したため、先生は最終稿につきのような私言を添えてこられた。「安楽死の問題も重要な僧侶の関心事かも知れないが、もっと現実在即した医療者と宗教者の連携の問題に取り組んではどうか。そのための協力は惜しまない」旨の添え文だった。私自身の軽挙を恥じると同時に、何か模索するヒントをいただいたような気がした。これが第一の出来事である。

二番目はハワイ開教区からの声である。ハワイといっても、移民一世に対して布教活動をしていた開教当時はともかく、現在の檀信徒（メンバー）は二世三世四世と世代が移り、

顔形や多少の生活習慣は日本的であっても思考、文化は完全にアメリカ人といってよい。

宗教行事もさまざまな面でアメリカナイズされているという。そのような状況のなかでメンバーの家のだれかがいよいよ死を迎えるというとき、アメリカ人の患者の多くが病院づきの神父や牧師（チャプレン）を呼ぶように僧侶も呼ばれるという。日本で学び僧階を得て赴いを僧侶は、たじろぐ。死後儀礼は学んでいるものの、かつての臨終行儀のように、いままさに逝かんとしている人にどのような言葉を交わし、どのような作法をし、どのようなことを伝え往生を迎えさせるべきなのか……。ハワイに限らず、わが国においてもこのような場面に檀信徒から「和尚さん来てくれ」と依頼があったとき、私たちはどう対応

したらよいのだろうか。人の生き死にに深く関わっている立場として、何か根本的な大きな問題を提示されたような気がした。

三番目は若き女性編集者との出会いである。ある日の新聞にひとりの女性のインタビュー記事が出ていた。仮りにSさんとする。

Sさんは老人問題をテーマとした雑誌の編集長である。彼女は別に老人問題に関心があるわけではなかったが、出版を扱う機関に勤務しており、そこである老人問題をテーマとした雑誌の創刊を担当することになった。当時、一九八〇年代前半は来たるべき（もうすでに来つつある）高齢化社会をテーマとした雑誌のブームであった。戦後の高度経済成長が、二度にわたる石油ショックを契機にある節目を迎えていたところである。物質の充足にひと

息ついて生き方を問いかけ出した時代であったともいえよう。Sさんは、たまたま担当した雑誌のこのテーマにのめり込んだ。老いを見つめるということは、人生そのものを見つめることだと気づいた。さまざまな生き方の問題が凝縮されている。ところが、その雑誌は三号で廃刊が決定してしまふ。多くの雑誌がそうであったように、ブームという雨後の筍のように創刊され、しばらくするとつぎつぎと廃刊されていく。問題意識が一過性なためなのか、企画がつづかないのか、それとも読者が離れていってしまうからなのだろうか。せっかくライフワークにするだけの魅力あるテーマに出会ったのに経済的な理由だけで廃刊しなくてはならないなんて……。Sさんは決心した、自分だけで継続出版しよう

と。以後、独立してほそぼそと継続している女性がいる——そういう人物紹介記事だったのである。その記事のなかで彼女は「老いの問題というのは死を目前にしているという問題であるのに、日本の社会は老いを語ることはしても死を語ることはしない。死を避けていては老いの問題の核心に触れることができない」と語っていた（さっそくSさんに連絡を取り、会って大いに歓談し、多くのことを学んだ。いまでも彼女との親交はつづいている）。

死、死、死。そうだ。寺院では死後儀礼はするが、死の直前の人の不安にはほとんど対応していない。また、マスコミの中心とした一般社会でも、だれでもいずれ死を迎える存在であることは自明であるのにその死が語られることが少ない。かといって、死にゆく人

たちが大した不安もなく安らかに臨終を迎えるのであれば、いまさらあらためて死を語ることもさして必要ではあるまい。しかし、ひとたび医療を中心とした現代人の死の周辺に目を向けると悲惨な場面、選択のむづかしい問題がたくさんあるではないか。心ならずも懊悩して亡くなっていく人のどれほど多いことか。現代の環境は、そして人びとの生き方は、安らかに死を迎えるための何かを欠いているのではないか。私の身の回りのことで、わずか一週間のうちに起こった三つの出来事は、そのことを示唆していたのだと気がついた。私自身にとってショックであり、深く心に残っていたのは、まさにこのことだったのである。

いまでこそ、一見、「死を語ることのタブ

「」がなくなり、逆に「死のブーム」ともい
うべき関連出版物の刊行ラッシュがつづいて
いる。しかし当時、あらためて死を見つめ語
ることが必要であると私は痛切に感じていた
し、事実、そういう必要のある社会状況であ
った。

それでは、現実の社会で、いま、何が問題
になっていて、どういう検討が必要なのだろ
うか。そして、私にとって何よりも重要なこ
とは、死の問題に関心をもつ一市民としてで
はなく、宗教者としてこの問題にどう取り組
むべきなのかということだ。文字どおり五里
霧中であつた。とてもひとりで取り組んでい
てもはじまらないと思い、何人かの同年代の
僧侶に「いっしょにこの問題を考えていかな
いか」と声をかけ、会がスタートしたわけで

ある。とはいふものの、「この問題」という
ことも自分自身がよくわからず、したがって
誘いの言葉もうまく表現できずというはなは
だ心細い状態でのスタートであつた。にもか
かなくとも以上のような経緯で発会し、当初は
月二回ほどのペースで集会を重ねていったの
である。

会の名称は、死の問題を包括しているデス
・エデュケーション（「死の教育」「死の準備教
育」などと訳されている）を学ぶという意味か
ら Death Education Seminar の頭文字を取り
D・E・S とし、アルファベットの会名をい
ちいち説明しなくてよいように臨死問題研究
会と添えた。座長（当時の呼称）は呼びかけ人
の私と決定した。

（つづく）

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ (3)

花 御 堂

勝 崎 裕 彦

四月は花の季節。桜の花を中心に、木蓮、躑躅、辛夷の花、連翹、菜の花、豆の花など、まさに花前線の北上と共に爛漫の春が訪れる。その四月八日は釈尊仏陀のお生まれになった日。この日は仏生会、降誕会、灌仏会などといわれて、各寺院では釈尊降誕を祝福して法会を営む。山内には、たくさんの美しい花々で飾り付けられた花御堂を置く。屋根を葺くのも、四阿風の作りの四本柱にも、四月の花が色とりどり。かわいらしい小さな誕生仏を

安置して、参詣の人々は竹の柄杓で甘茶を灌ぐ。

大空の下あるき来て花御堂(禪寺洞)

本堂の正面、向拝に置かれた花御堂は小さいけれど、飾り立てられた百花が繚乱と咲きほころぶ。その小さな花の塔の中には、もっと小さな誕生仏がほえみを誘う。はるか二千五百年の昔、インドはルンビニーの園の花亭で、生母マヤー夫人の暖かい、いつくしみの眼差しを受け継がれたシッダータ王子。マヤー夫人の慈愛の心を花々に映し、シッダータ王子のかわいらしさに托して、すこやかな子供たちの成長を願う。

幼な子の瞳集める花御堂(裕彦)

◇◇◇好評の新作◇◇◇

暮らしに
生かす

仏教成語辞典

寺内大吉・栗田順一編 価二二〇〇円

◎ 仏教の心と豊かな智慧のエッセンス！

仏教語が日常用語として多くの人に使われているが、その仏教語を理解して、またその語意を把握して使っている人がどれほどいるだろうか。本書は馴じみ深い仏教成語一二九の原意、仏教の真髄をわかりやすく説いた仏教入門書。

△出版・発行△

東京堂出版 東京都千代田区神田錦町三―七 電話(〇三)三三三三―三七四一

*浄土宗出版室において特価で販売しています。

お申し込みは浄土宗出版室 電話(〇三)三四三六―三三五一まで。

季語やぶにらみ (生)

あすなる忌 (二月二十九日)

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
——^{いち}

(随筆家)

る、「友」と題する詩である。

一月二十九日の夜、先月号の「木枯・料峭、反戦句を読む」の原稿を清書していた時、ふと井上さんにも反戦詩があったのを思い出した。井上靖第一詩集「北国」に収められてい

どうしてこんな解りきったことが
いままで思ひつかなかったらう。

敗戦の祖国へ

君はほかにどんな帰り方もなかったのだ。

——海峡の底を歩いて帰る以外。

昭和二十一年五月二十一日号の「京大学園新聞」に載ったこの詩を、初めて目にしたのは「北国」が発刊された昭和三十三年の春であつたが、真つ先に思ったのは二十年フィリッピンのルソン島で戦死した伯父のことであつた。へおいちゃんも、バシー海峡を歩いて帰つて来たんだよね。その時、私に思い浮かぶ海峡といえば、台湾島とルソン島を隔てるバシー海峡しかなかった。へ熱帯の海峡の底を、珊瑚が生い茂り、色とりどりのイソギンチャクが繚乱と咲く花園の道を、へおいちゃんは独り歩いて帰つて来たんだよね。そう思う

と、不意に涙がこぼれて止まらなくなった。私は普段思ひ出すこともなかった伯父のために涙を流し、飲みさしのコップに冷や酒を注ぎ足して、酒が好きだった伯父に献杯した。この詩には、そんな思ひ出もあった。

久しぶりに書棚から抜き出した「北国」を前にして、さて何処に挿入したものやらと思案していた時、突然井上さんの訃報をつけたしにしていたテレビが報じた。

「今夜午後十時十五分、東京築地の国立がんセンターで急性肺炎で亡くなりました。八十三歳でした」

と、コメントは短かったが、私にしてみれば、まさに青天の霹靂であつた。丁度、私が清書の手を休めて、「友」という詩に思ひを巡らせていた頃、亡くなられたのである。偶

然にしては、あまりにも苛酷であった。もう何も手につかなかった。テレビの音も聞こえなかった。ただ、頭の中を井上さんの詩の断片が、小説の一節が、随筆の一章が、次から次へ脈絡もなく、走馬灯のように駆け巡っていた。いや、走馬灯じゃないな、走馬灯ならいつかは元の絵に戻るが、この場合なんと言ったらいいのだろう。絢爛と夜空を彩る花火というのが、月並だが一番近いかな、一方ではそんなことも思っていた。

私にシルクロードへの目を開かせてくれたのは井上さんの「漆胡樽」を初めとする一連の西域小説だったし、翌檜（あすなろ）という名の木があることを教えてくれたのも井上さんだった。「あすなろ物語」（昭和二十八年一月）六月「オール読物」連載）を読んで、へあすは

檜になろうって、どんな木だ？と、早速辞書で検索したりしたものだった。それがどんな辞書だったかは忘れたが、「あすなろ」を引くと、「あすはひのき」を見よと出ていて、そこを見ると、「花は単性雌雄同株なり。材は白色にして淡黄を帯び、木理直く脂気多くして湿気に堪ふ。用途甚だ多し。ひば」と、そんなことが書かれていた。そして、へなんだ、ヒバのことか。ヒバなら知っている」と、多少がっかりしたのを思い出す。

昭和二十八年といえば、大学の二年から三年になる時で、金がなくていつもビイビイしていたが、それなりにのんびりした学生生活を送っていた頃である。

「あすは檜になろうか。いいないじらしくて。まるで俺みたい」

「俺達、言ってみればみんなあすなるだもん
な。檜がなんであるかが分かっているのはS
くらいのものか？」

「俺が?! 知らんそんなもの。それにしても
この冴子っての、魅力あるよな」

冴子というのは、「あすなる物語」の主人
公の梶鮎太が小学六年生の時、祖母と二人暮
らしの平穏な山村生活の中にふらりと現れ、
拳句は天城山中で大学生と心中した遠縁の娘
の名であるが、Sは常々こんなタイプの娘に
憧れていたのである。

「不良なんかじゃない、冴子は。あまりにも
純粹で、自分に忠実でありすぎたため、世間
のバカ共には理解できなかっただけなんだ」
「冴子役をやるとすれば、有馬稲子しかない
いな」

将来映画監督を夢みていたFは、小説の登
場人物に片っ端しから配役するのを趣味にし
ていたが、目下売出し中の女優の名を挙げて
「いいと思わないか」

と、Sに図った。しかしSは取り合わず、
「ああ、冴子みたいな娘がいたら、俺心中し
てもいい。『あすは檜になろう、あすは檜に
なろうと一生懸命考えている木よ。でも永久
に檜にはなれないんだって！ それであすな
ろうというのよ』……」

と、小説の一節を有馬稲子の声色で言うと、
長々と芝生に寝そべった。

「気持ち悪い声出すなよ。お前と心中してく
れるような物好きはいねえよ」

その時、そう言ってまぜ返したHが、Sの
死を報せて来たのは、卒業して二十三年も経

った晩秋の夜であった。

「あまりかけたくない電話なんだが……」

と口ごもって、HはSの死を告げた。

「癌だったそうさ。川崎辺りで鉄工所のようなことをやっていたらしいが、詳しいことは誰も知らない。二年ばかり前だったかな、偶然会って一晩銀座で飲んだことがあるが、かなり荒れた飲み方をしてたよ。あいつだけは学者になって、仲間内では檜第一号になると思っていたのに……。どこで歯車が狂っちゃったのかなあ。あいつらしいといえば、結婚しなかったことぐらいか……」

「冴子はとうとう現れなかった。そういうことかな？」

「うん。親の勧めで結婚したという噂は聞いたことがあるが、本人は否定していた。いま

となつては、あいつの言葉を信じてやろうよ。……あすなるのまんまで逝っちまいやがつて！」

一方的に喋って、Hは電話を切った。受話器を握りしめていた掌に、その年初めて冬を思わせる冷たさが、しんしんとしみてきた。

井上さんの死は、そんな古いことまで私に思い出させてしまった。

あすなる（翌檜）ヒノキ科の常緑高木。東北地方から九州まで分布。（中略）初夏細い枝先に青味を帯びた長橢円形の雄花と淡黄緑色で紅色を帯びた雌花がつく。実は広橢円形の球果で十月頃熟する。（後略）——日本国語大辞典。

辞書にはどれも似たり寄ったりのことが書かれていますが、開花の時期にいささか疑問が残る。というのは、井上さんの第二詩集「地中海」の中の「アスナロウ」という詩に、次のように記されているからである。

下北半島のアスナロウの林をジープで走った。夕方から雪が落ち、突端の小さい部落へはいった時は吹雪になっていた。同行した森林管理人は宿の土間で、ゴム長の雪を払いながら、アスナロウの交配が寒中、このような吹雪の中で行われるということを知った。

私は昼間通り抜けた鬱蒼たる大原始林が雪に降り込められているさまを目に浮かべながら、絶えてない解放された思いに打たれ

た。そこでは生と死はスポーツのように軽快であった。どうしてこのようなことに気付かなかったのか。太古から死はまさしく吹雪のように空間に充滿して来るものであったし、その中に於て、生はアスナロウの花粉のように烈しく飛び交うものの以外の何ものでもなかった筈だ。

森林管理人の話に虚構があるとは思われず、それが井上さんの感動を呼んで、この一篇の詩に凝縮したものと私は見ているが、そうだとすると、辞書の記述は速やかに改めてもらわなければならない。それにしても自然の営みの凄さには、井上さんならずとも感動を通り超して慄然たるものを覚える。

井上さんが食道癌の手術をされたことも、

その後大著「孔子」を執筆されたことも、私は知らなかった。私淑した師の消息を知らなかったとは甚だ迂闊な話であるが、ご高齢だからと思っていたのである。遂に親しくその聲咳に接することはなかったが、時折テレビで拝見すると、言葉を選んで話されているお顔が印象的だった。私などから見ると、井上さんは亭々と聳える大檜になった人であるが、ご自身は亡くなるまで「あすは檜になろう」と思い続けていたようである。そのことは第八集「星闌干」の「大落葉の日」にも窺える。

——迅雷風烈には必ず変ず。

大雷雨、大烈風の時には、孔子は必ず衣冠を改めて、これを迎えたという。

大落葉の日は、如何にすべきであろうか。

孔子門ならぬ私は、己が一存で、終日、書齋に坐り、時に視線を庭に向けて、葉の落下するのを見ている。(中略)

そして思うのだ。私も亦、私自身も亦、何ものかを、次々に払い落してゆかねばならぬと、何ものかを。

いまはただご冥福を祈るだけで言葉もないが、一月二十九日を私は「あすなろ忌」と呼び、師を偲ぶすがにしたいと思う。とはいうものの、いまの私には献句をするほどの余裕は持ち合わせていない。

「あすなろ忌」に、下北の大地では、すでにあすなろは吹雪の中で花粉を飛ばしているのであろうか。

(この項おわり)

○「浄土」表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』四月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度及び一昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―一八七

釈尊と浄土教（上）



うえの
野

ひろし
浩

私共の生きてゆくこの人生社会には、あらゆる種類の人が混在する。地位の高い人、地位の低い人、財宝に恵まれた人、財宝に乏しい人、健康な人、身体に

障害のある人、若い人、老いた人、黒い人、白い人、善人そして悪人などが入り混って生きている。これらの人々が無限につづく「時」の流れの中に流されてゆ

く。しかしこれらの人々のすべてが好むと好まざるとにかかわらず、一度は「死」なる人生の限界点を迎えねばならないのである。そしてその人々は限らない欲望の渦の中にあえぎながら、遂に老境に入り、病気になやまされ、やがて死の影がしのび寄れば恐らくなにびとといえども「人間はいかに死んでゆくべきか」を真剣に考えるのではないであらうか。

ところで私はこの現世の社会において多くの人々の姿をみることができる。この人々はあるいはすでになき両親、あるいは祖先などの霊を慰め、いんぎんに供養をする姿をみることができるのであ

り、またおのれやおのれの近親の幸福、あるいは息災を願う姿をみることがある。この姿をみても多くの人々は目に見ることのできない、大いなる力に対して熱心に祈る姿がみられる。そうしてみると、これらの人々はすべて自己の認識をこえた世界、超自然の大きな世界の力を信じ、あるいはまた恐らく来世の生を信じ、来世の安楽な世界に生活できることを心から願っているものが多いと思われるが、これはあやまりであらうか。

さて、仏教の開祖、釈尊はわれわれ多くの人々に対して一体いかなる教えを与えてくれたのだろうか。釈尊は主として

私共に「この現世における人間の実存そのものを土台として、その生存方法、生活のあり方はいかにあるべきか」について懇切丁寧な教えを説いたのである。すなわち、釈尊は出家修行者に対しては極めてきびしく、在家の信者にはそれ相応に極めて平易に教えを説いた。しかしその教えの根本となるものには勿論釈尊が修行の結果さとり得た宇宙の真理、すなわち縁起の法則、および四聖諦、八正道の教えが流れていたことはたしかである。

このように釈尊は「現世において人間が理想的人間像になるために人間の踏むべき倫理の道」を説いたのである。しか

し釈尊は人間の死および死後の運命についてはあまりふれたがらなかったという。ある人が釈尊に「我および世界は常住であるか、あるいは常住ならざるものであるか、我および世界は有限であるか、あるいは無限であるか、自体と靈魂は一つであるか、あるいは別であるか、人格完成者は死後に生存するか、あるいは生存しないか」というような質問を發したとき、釈尊はこれに対して何も答えなかったという。このような哲学的な問題について釈尊が答えなかったというのは釈尊がこれを解明できなかったのではなく、これらの問いに対しては釈尊は答

える必要を認めなかったからだと伝えられている。

いま、釈尊の言葉を忠実に伝えていくという原始仏典から次の句を引き出してみよう。あるときマハーナーマという釈迦族の人が釈尊に対して「私が死んだらどうなるのであろうか」という質問をした。これに対して釈尊は次のように答えたという。「マハーナーマよ。恐れることなかれ、汝の死は悪からず、汝の臨終は悪くはないであろう。或る人の心が長い間信仰を修し、戒めを修し、学問を修し、すべてを捨て去り、智慧を修したのであるならば、実にその人の肉体は四元

素よりなり、父母より生れ、飯、粥に養われたものであり、無常でついえ、磨滅し、破れ、壊れるものであるが、それをこの世では鳥が食べ、鷲が食べ、禿鷹が食べ、犬が食べ、野牛が食べ、また種々なる生きものが食べる。しかし長い間信仰を修し、戒め、学問、捨離を修したその人の心は上方に赴き、すぐれたところへ赴く」と。

そしてまた、原始仏典より次の詩を引きだしてみよう。すなわち、「法（に従って得た）財を以て母と父とを養え、正しい商売を行え、つとめ励んでこのように暮している在家者は（死後に）『みずから

光を放つ』という名の神々のもとに生れる」と。(スッタニパータ四〇四)。また「嘘を言う人は地獄に堕ちる。また実際にしておきながら『わたしはしませんでした』と言う人もまた同じ。両者ともに行為の卑劣な人々であり、死後には同じような来世をたどる(地獄に堕ちる)」と。

(スッタニパータ六一)

これをみても釈尊は人間死後のことについて極めて細かく考えていたことはうたがう余地もない。人間は徳をつみ、善行のあったものは死後上方に赴く、すなわち今日でいう安楽土に往生し、また真面目に働いてえた財をもって善行をつ

み、つとめにはげんで生きている人は光明の神々のもとに生れわかり、その反対に嘘、いつわりをもって生活する人は死後いわゆる地獄におちてゆくという、はっきりとした考えをもっていたことは明らかである。

ところで「人間の死後の運命」については釈尊の流れを汲む大乘仏教が、極めて詳細かつ大きな教えを説いているのである。そこでいま大乘仏教の興起の有様とその教義について述べてみることにしよう。

釈尊の仏教教団は釈尊の入滅後、四百年程の間に大なる発展をとげた。釈尊の

後しばらく行われた仏教は原始仏教といわれ、釈尊の教えに比較的近い教義を奉じていた。その後原始仏教は幾多の分裂を重ねていったが、紀元前後になって原始仏教にあきたりない出家修行者と在家信者が遂に新しい仏教、大乘仏教を興したのである。そして大乘の徒は原始仏教を「小乗仏教」と呼び、自らの仏教を「大乘」と呼んだ。大乘仏教においては出家者および在家者を問わず修行の結果さとりをひらいた覺者を仏陀、将来仏陀になりうる求道者をすべて菩薩と呼んだのである。これらの人々は次々に膨大な大乘經典を編纂していったものと考えられ

る。

これらの修行完成者の手になった大乘經典の中には私共の来世の運命に関する重要事項が数多く説かれている。そしてその中でも次のような語句が特に注目を引く。それは「一切の衆生に悉く仏性あり」という句であり、これはまた「如来藏」という教え方もある。この思想は初期仏教の「自性清淨心」という語の中にも見られるが、しかし大乘仏教においても特に発展した思想である。これは私共はすべて仏心を藏し、修行の結果如何によつては私共も菩薩になることができるという意味である。

(つづく)

最新好評のトラクト

竹中 信常 著

佛 心 凡 情

ポケット版二四六頁

イラスト入り

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた文集。法話の材料または施本としてご利用下さい。

定価五〇〇円

二料 二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋 一―二―六
電話(〇三)三二六―五九四四 振替(東京)一―八二四七

話の旅 (九)

超常物語

⑥

まつ くら ぎょう しん
松浦行真

(浄土宗出版室長)

「なんだい、いまごろあんなことを書きだして」

と、朝の挨拶ぬきで、竹中信常先生がおっしゃる。

竹中先生については、もはや紹介の必

要もあるまい。勸学で文学博士で、浄土宗総合研究所の所長——すでに功成り名とげられた学者であるが、七十七歳でもってなお壯者をしのぐ柔軟な頭脳、旺盛な企画力という点において、まことに貴

い方なのだが、だいたいこの先生がこう
いう言い方をなさるときは、ご機嫌がい
いときなのである。

「あんなことって、何ですか」

「例の『超常物語』さ」

「あ、あれね。だって僕は実際の体験者
なんだから」

「君も書いてたけど、ああいうことはい
くらかあるんだよ」

「そうですってね。無数にあるようです
ね」

「とくに寺はね、その率が高い。ぼくが
子どもの時、茶の間で皆といっしょにい
るでしょ。すると、おばあちゃんがね、
『あつ、いまそこを誰それさんが横切っ
た。あの人もとうとういけなかったか
ね

え』なんて言うんだよ」

私は背筋が、ちよつとばかりゾクツと
した。

「すると必ず、枕経の頼みがくるんだ
よ」

そこからは前号に書いた、板垣隆寛さ
んの場合と同様となる。

「そんなことが、よくあったよ」

「うーん」

と私はうなった。この話は、竹中先生
のおばあちゃんが、部屋を横切る人の姿
を視認なさっているところが凄い。ひょ
つとしたら先生のおばあちゃんは、超常
的な能力をお持ちだったのかもしれない。
私の背筋を冷たいものが走ったとい
うのも、その点であった。メモついで

に、この物語にもこの挿話を記録しておくことにした。

もしあなたが、こうした例話に興味をお持ちなら、E・キューブラー・ロス女史の「死ぬ瞬間——死にゆく人々との対話」をはじめとする女史の一連の著作、ならびにレイモンド・ムーディ医師の「かいま見た死後の世界」などを読まれるといいだろう。ロス女史は医学博士で、もとシカゴ大学で精神医学を専攻する助教授だったし、ムーディ博士はアメリカ人で精神科医だった人だ。前者の出版社はいずれも読売新聞社だが、後者はちょっといま手許になくて失念したが、どちらもまじめな書物である。

超常現象は、たしかに存在する。

なのに、人々はなぜ、胡散くさく思うのだろうか。

答えは簡単である。カネ儲けのために超常現象を実演する人が、かなりの数、存在するからである。言葉をかえていうなら、超常能力者に、インチキ、詐欺、手品の技術を応用する人が、だんぜん多いということだ。

例えばスプーン曲げで一世をフウビしたユリ・ゲラーは、もと手品師だったというし、また霊媒とか行方不明者捜しなどを、おカネ儲けでやっている人は、まづインチキとみてまちがいないと、聞いたことがある。

超常現象の体験者が多いにもかかわらず、そうしたインチキの多いことが、超常現象そのものを、胡散くさいものにしているのである。

ところで、超常現象の例話はヤマほどあるが、だからといってそれらを「霊の存在」と直結させていいかどうかとなると、これは新心理学者の間でも、まったく疑問なのだそうである。筆者は前に、私自身の体験を語ったあとで、

——しかしそれを靈魂と呼べるかどうかは、わからない。

と書いたが、それはそういうことが背景にあったからである。

例えば二人の霊媒がいて、一人は東京で、もう一人は九州の福岡で、同時に三

島由紀夫の霊を呼び出して、いろいろ話を聞いたとする。しかし東京でも福岡でも、どちらか一方だけの話を聞いたのではスジがよく通らないが、両方の話を突き合わせてみると、スジもよく通るし意味もよくわかる、ということにでもなれば、これは靈魂は存在すると言える。空間を超越して、一つの意思が二つの話を統一しているからである。けれども現実には、こんな例は一つもないし、また実験もされていない。

ただアメリカには、こういう実例はあるそうだ。

つまりAという霊媒が、その霊にむかい、

「こんどあなたが呼び出されたときは、

署名がわりに、○に△を書いて見せてください」

と言って、会見を打ち切った。

すると今度、そのことをまったく知らない別のBという霊媒が、その霊を呼び出したとき、その霊が「○に△」と判断できるものを書いた……。

この話はたしか、宮城先生の著書にも紹介されていて、知る人も多いはずだが、しかしこれは先生によれば、「霊魂の存在」の証明にはならないのだそうである。つまりテレパシーがあれば、A霊媒の言ったことは当然、B霊媒にも受信されていて、それが書き込まれてゆく（再生されてゆく）ということは、考えられないことではないからである。

そんなわけで、いまだに世界の新心理学者から認知されるような、「霊魂の存在」を証明するほどのものは、何もないのだそうである。

話がそこまできたところで、私は宮城さんに聞いた。

「霊魂の存在がないのに、霊魂的なものを見た——つまり俗にいうところのユレイを見た、という報告がたくさん存在するというのは、どういうことになりますかね」

宮城さんはちょっと間をおき、

「これはあくまでも仮説ですが……」
と前置きをして、こんな話をしてくだ

すった。

「『人間の意思とか情念とか、あるいは執念といったものが、死後にも電気的なもの、つまりエネルギー化するとすれば、それはある一定の期間だけは、残るのではないか』という仮説は、成立するんじゃないか」

——なるほど、エネルギーとみるのか。

と、私はその考え方の流れに、ちょっと虚をつかれた思いがした。

「しかし、だからといってそれを靈魂とはいえない」

なぜなら、靈魂なら永遠に存在してもよかりそうなものだが、大昔のユーレイがでてきたというためしは、いまだかつ

てないのだそうである。「ユーレイを見た」という報告は、だいたいにおいて、そのユーレイとなる人の死後五十年まで、それ以上のものはないという。

それでは、いったい五十年以後はどうなるのか。

伝説となつて、むかしここにはユキという女の幽霊がでて、それでいまでも、「『ユキ泣き坂』と申しますのさ」といったみたいな伝説だけが、残ることになるのだそうである。

だから靈魂ではなく、念力的なるものが、エネルギーみたいなものに化して、そして残つて、あたかも靈魂的な現象を起こすのではないか、というわけである。

ここで、「浄土」の読者の方なら、まず思い当たられる人があるのではなからうか。

浄土宗では、五十回忌まではきちんと法要をもよおして、回向することになっている。たしかに昨今は七十回忌、百回忌までおこなうが、これは万一のことがあつてはならないからという「念のため」の年回である。昔は五十回忌まで、あとは「先祖代々」のほうにはいつてもらつて供養をする、これが決まりであつた。

この五十回忌という数字と、ある超常現象が伝説化してゆく年限が五十年という数字と——この申しあわせたような一致（暗合かもしれないが）、そのことに、ま

ことに不可思議な思いがしてならないのは、私だけであらうか。

もしこの説が当たっていたら、ガダルカナルの怪異現象も、来年か再来年で消滅するはずである。ガダルカナル島争奪戦の始まったのが昭和十七年（一九四二）八月、撤退完了が十九年二月、凄惨な戦闘のあらかた終わったのが十八年（一九四三）いっぱいだから、ほぼそういう勘定になる。

もし慰霊のためにガ島を訪れた人の身に、何事も起こらなくなったら、私はこの説を、全き意味において信じるようになるかもしれない。

（了）

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介を ◇ ◇ ◇

月刊誌『浄土』の刊行、なんとか続けているという現状です。編集にもにも遺漏が多く、また校正のミスも相変わらずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後もしづつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上のお願ひもできにくいことではありますが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げます。なにを隠しましょう、一ページ、ポツカリあいた埋め草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや信仰的な感想あるいは思うことなどをエッセイ風におまとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十七巻 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成三年三月二十五日

印刷

平成三年四月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷 鈔

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話〇三（三二六）五九四四

〒一〇三（振替）東京八一八二一八七

新刊

法然上人

浄土三部経講説

B6判五四二頁
 価四、五〇〇円

法然上人撰述の無量寿経釈、観無量寿経釈、阿弥陀経釈の原典を訓読註解して和訳し、更に和字三経釈の原典を註解和訳したものを加え、本宗所依の経典に対する宗祖の明解な義解を記す

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
 価三、六〇〇円

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B6判四二四頁
 価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B6判二九六頁
 価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B6判八四七頁
 価六、八〇〇円

和訳 浄土三部経

B6判四七四頁
 価二、五〇〇円

和訳 法然上人 選 択 集

B6判三八七頁
 価二、五〇〇円

和訳 善導大師 観経四帖疏

B6判五八四頁
 価三、五〇〇円

和訳 善導大師 六時礼讃

B6判二六五頁
 価二、四〇〇円

○葉書でお申込下さい。代金（送料実費）は後払（振替用紙同封）。

編と訳 村 瀬 秀 雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発 行 所 常 念 寺

電 話 0465-43-1352

振 替 横 浜 3-8296番